

BPW スリランカ 20 周年記念イベント参加報告

日本BPW連合会 企画委員長 平松 昌子
国際委員長 花崎 正子
元会長 黒崎 伸子

2013年8月10日から12日の3日間、BPW スリランカの創立20周年を祝う会合が、「経済開発一起業と観光」をテーマにコロombo市のキングスパーレイホテルで開催された。日本からの参加者3名が、それぞれ分担し、また、それぞれの視点で報告する。

「チェンジ-変化-に向けて、スリランカの女性たちは」

平松 昌子

(連合会企画会長委員長/ BPW 東京クラブ)

今回の会合には、ほかに BPWI のフリーダ会長とスーザン・ジョーンズ地域コーディネーターやオーストラリア、シンガポールそれに台湾からの会員や地元スリランカの会員・関係者など約100名が参加した。会場でのイベントは初日のみ、あとは現地視察などで構成されていたが、初日の発言者として登壇したのは、BPWI の役員ら関係者を除くといずれも投資や開発計画などの責任者であり、2日目・3日目の視察ツアーも観光地を含む地域開発の状況視察を目的としていた。

女性の集会にも関わらず、バックにつめて渡された資料は、開発計画書や観光開発など起業家や投資家向けのものがほとんどで、紛争に終止符を打って国の開発に取り組む国家戦略が反映されているようだった。BPW スリランカの創立者は今も会長として活躍するジャナキー・グンワルデナでスリランカ中部の大地主に嫁ぎ、地元農村でのディベロッパーとしても活躍している。自分は今もう78歳だというから、私は80歳だと言っていた。

慌しかった3日間の体験を通して、改めて、「長年続いたスリランカの武力紛争とは何だったのだろうか?」「何をもらし、何を失ったのか?」「平和とは何か?」を考えさせられた。

15年ぶりのスリランカ 個人的には1997年に次ぐ2度目のスリランカ訪問だった。この時は「タミル・イーラム解放の虎 (LTTE)」による武力抗争がエスカレートしているときで、宿泊したホテルのすぐ近くにあるホテルが私たちの訪問直前にテロの攻撃を受け、瓦礫が周辺の路上にも散乱していた。日本外務省からは、渡航に関する「注意喚起」が出されていた。

こうした環境だったが、BPW スリランカは、創立僅か4年目でアジア太平洋 (AP) 地域会合の開催国となった。日本の河田和子さん (大阪)

ブ) がリージョナル・コーディネーター (RC) として初めて国際会議を仕切るというので、その応援もかねて上原敦子さん (東京クラブ) とともに参加した。すべてが緊迫した社会情勢であり、空港からコロombo市内までは深夜にも関わらず車の大渋滞で、いつ到着できるか予測できず異常な不安に押しつぶされそうだった記憶がある。

そんな中で開催された BPW スリランカによる地域会合 (RM) だったが、19年の長期政権を保つバンダラナイケ首相からお茶に招かれ、当時のシルビア・ペリーBPWI会長らと公邸に出向いた。大統領は、80歳だった。だが、その鋭い眼光には混乱を生き抜く強い力があつた。新しい議事堂を新たな土地に建設中で、これが完成すると首都がコロomboから移転するといった話が出て、建設中の議事堂見学にも出かけた。(暗殺された夫の跡を継いで政界に進出し、この時は3回目の首相の座で、娘が大統領に就任していた)。

【スリランカ国旗】



【スリランカの地図】



スリランカの歴史(概要)-武力紛争を理解するために

インドに寄り添った“真珠の涙”といわれる島の歴史は古く、紀元前3世紀にアシーカ王の王子マヒンダがインドから渡来して、住民であるシンハラ人に小乗仏教を伝えたことある。以後、シンハラ人はこの小乗仏教を守ってきたが、BC2世紀にタミル人がインドから移住を始めた。後日の紛争

の遠因はこの頃からともいわれる。そして、植民地としての歴史は、16世紀初頭、ポルトガルの進出で始まった。

1505-1658年 ポルトガルはこの地を「セイロン」と称し、南部のゴール（現在の高速道路の最南端）に植民都市を建設。

1658-1796年 オランダがオランダ領セイロンとして管理。

1796-1948年 イギリスの植民地となる。

イギリス東インド会社のコロンボ占領に始まり、イギリス本国の直轄植民地へ（1802）。さらに1815年、英軍のキャンディ侵攻で、それまでの王権は消滅。1815年ウィーン会議で正式にオランダからイギリスへの譲渡が決定。1832年には、全土の均一支配を実現した。

1931年 ドナモア憲法施行され、アジア発の普通選挙が実施された。

1948年 イギリス連邦内の初の自治領として独立。しかし・・・

1949年 タミル人の選挙権を剥奪。

1951年 サンフランシスコ講和会議で、ジュニウス・ジャヤワルダ蔵相が対日賠償請求権を放棄：「日本の掲げた理想に、独立を望むアジア人の多くが共感を覚えたことを忘れないでほしい。憎悪は憎悪によって止むことなく、慈愛によって止む」（仏陀の言葉）。（この演説は各国の賛同を得、日本が国際社会に復帰できる道筋を作り、その後の日本-スリランカの深い親交につながった。）

1956年 総選挙実施。ソロモン・バンダラナイケ首相（Mr.）誕生。シンハラ仏教による仏教ナショナリズムが盛り上がり、シンハラ語の公用語条例が成立、タミル人を公務員から排除。東部地方とコロンボで暴動が起きる。

1959年 ソロモン・バンダラナイケ首相暗殺。

1960年 シリマヴォ・バンダラナイケ首相（世界初の女性首相）誕生（1960-65）、以後、2期（1970-1977及び1994-2000）首相を務め、その後、娘チャンドリカ・クマーラトゥンガは第5代大統領に就任。

1972年 バンダラナイケ首相が仏教を準国教に。スリランカ共和国と呼称。反政府組織「タミル・イーラム解放の虎（LTTE）」成立。

1977年 ジャヤワルダ首相、資本主義の導入を進める。

1978年 議院内閣制から大統領制に国名も現在の国名に変更。

1983年 シンハラ人（仏教）とタミル人（ヒンズー教）*1の対立深刻化、暴動が全国に。

1987年 LTTE、独立を宣言

1988年 プレマダーサ大統領が内戦終結を画策

したが、失敗（1993年に暗殺）。

1989年 人民解放戦線のリーダー：ローハナ・ヴィジェウィーラ暗殺。

1997年、BPWスリランカAP地域会合開催。日本から参加（バンダラナイケ首相3期目）。

2001年 バンダラナイケ空港襲撃事件。

2004年 スマトラ沖地震・津波で3万人が死亡

2005年 ラジャパグザ大統領就任。LTTEに強硬姿勢。

2006年 LTTEが東部で農業用水を止めたことで、政府軍空爆開始。

2009年5月 完全制圧。大統領権限強化。経済成長戦略へ。インフラ整備。

2013年 バンバントタに第2空港開港。

BPWスリランカ20周年行事-日本からも参加。

BPWスリランカ20周年記念イベント開催の社会的背景

武力紛争に終止符をうった、ラジャパクサ大統領が、その実績を背景に指導力を強め、社会開発への取り組みを最大懸案事項として推進するという社会環境の下で開催された。ディープサウスと呼ばれる南部は、歴史的にも早くから植民地政策の舞台となった地域だが、現代もシンガポールやインドネシア、そして、中国・日本などのアジア諸国と中東の産油国さらには、アフリカ大陸やスエズ運河にもつながる海上交通の要衝となる地理的条件と海の深さなどの自然条件を備えており、経済開発の重要な拠点としてのインフラ整備が進んでいる。コロンボ-ゴール間は、高速道路は完成していた。（開発の現状については、本大会3日目として、別に報告する。）

BPWスリランカのこと、そして創立20周年大会のこと

20年前（1993）、女性運動の先駆者ルナ・フィリップ博士の活躍に感動したジャナキー・グンワルデナは、数人の志を同じくする女性たちとスリランカにBPWを立ち上げた。彼女はコロンボ郊外の大地主と結婚し、建築家という仕事をもっていた。当時、社会的にはシンハラ民族主義が強まり、タミル人弾圧が強化されて武力衝突が始まっていた。バンダラナイケ女史が3度目の首相の座に就くのはその翌年である。結成4年目にしてAP地域会合の開催国となった。

そして今回の旅 20周年大会参加のため、福岡空港を出発した黒崎・花崎両名と、成田空港を出発した平松は、香港空港で合流した。次のトランジットはシンガポール。ここの搭乗待合室で、フリーダ会長とスーザン・ジョーンズRCに出会った。コロンボ到着は深夜に近かったが、予約していた出迎えの車に乗り込みホテルに向かう

空港からホテルは 27km、予想以上に遠い。暗がりの中を走ること約 1 時間でまばゆいばかりに輝くキングスベリーホテルに到着し、チェックイン…。だが部屋の掃除がまだ済んでいないので、バーで飲み物を飲んで待っていてほしいという。午前 0 時をすぎたこの時間だというのにロビーでは結婚式をおえたグループが花嫁花婿を囲んで写真を取り合っていた。待つこと 30 分、ようやく部屋に案内された。

部屋に入って驚いた。ツインベッドタイプを予約したはずなのに大なキングサイズのベッドが一つ。ここで二人抱き合せて泊まることになった。とうに日付は変わっていたが、私たちにとって問題はベッドでなく、ネットだった。コンセントの問題はクリア、電源をいれ、PC を立ち上げ、ネットの接続ができた。ラッキー。東京とつながった。もう、午前 2 時過ぎ。

.....
8 月 10 日の朝。大会初日。チェックインから 5 時間後の 7 時半にレストランへ。お目当てのヨーグルトを楽しんで、会場に向かい登録を済ませた。

会合初日

初日午前の会場は、円卓が並ぶ宴会場形式で、ステージに花が飾られている。受付で渡されたのは、会合の告知資料として半年も前から配信されている「パンフレット」のみ。



[写真上]大会開始前のセレモニー会場

「送金証明のコピーを事前に送れ」と再三言ってきた割には（実は送金は 2 日前で、書類は手持ちだったが…）、何の請求もなくすでに名札も準備されていた。オーストラリアのメンバーに会い、シンガポールに会い、何よりも大勢の台湾メンバーと出会った。台湾の呂会長は今回、参加せず。

開会時刻 9 時を大幅に遅れて突然、民族衣装に楽器を打ち鳴らした男性たちの先導で、BPW

International 会長ら、本日の主賓・主役が入場。プログラムには BPW 各国代表・国旗とともに入場とあったが、国旗はステージ脇に小さな万国旗が飾られていたのみ。



[民族衣装の男性たち & 飾られた国旗-BPW]

ステージ前の花飾りに設えられたローソクのような小さなオイルランプに各国からの参加者が点火し、続いてスリランカ国家斉唱。全体のスローガンは、「変化」・・・ということで Change とデザインしたピンバッジを配った。そのためのテーマは、「経済開発：共同起業の推進と観光開発」だった。

国歌斉唱、実行委員長挨拶の後のプログラムで、発言者は手元の名前とは違っていた。発言予定の大臣の登壇がないなど、スピーカーの変更があって、あとで聞いた話だと、フリーダ会長もスーザン RC も突然発言時間を 10 分から 30 分に変更されたり、かなり振り回されたようで、頭を抱えていた。

「紛争終結から安定・繁栄へ？真実は・・・」

黒崎 伸子

(連合会元会長／BPW 長崎クラブ)

私にとってスリランカはいつも心の片隅にある国である。それは、国境なき医師団 (MSF) で初めて活動した 2001 年に 4 カ月滞在した国で、その後も 2007・2009 年にも医師として仕事をした。その後、ずっと状況を見守り、MSF にいると 2012 年秋の MSF プロジェクト閉鎖までは、常に情報を得ていたので、常に寄り添っている感じがしていた。

BPW スリランカメンバーからの再三の招待メッセージを受信した平松さんからの誘いもあって、治安安定後初めての旅として、今回の会合への参加を決めた。平松さんの記述には、反体制側の地域で何度も働いた私には、同感できない部分も多い。例えば、前ページ左段下方*1 にシンハラ人 (仏教) VS タミル人 (ヒンズー教) の対立とあるが、この国の長い紛争は宗教とは無関係である。確かにタミル人にはヒンズー教徒が多かつ

たが、私の暮らした地域では仏教徒もクリスチャンもイスラム教徒もいて、病院の手術室にもキリストやお釈迦様、ヒンズーの神様がいっしょに飾られていた。

今回、スケジュール調整のために一番先に登録して旅程を決定してホテルも手配したのは私だけで、他のお二人は website からの登録をしても相手からの応答がないとのことで、他のお二人は早期登録期限までに手配整わず、高い参加料と1日長い滞在となり申し訳なかった。

大会 1 日目プログラム

9:30 開会式:オイルランプ点灯式と国家斉唱: オイルを浸したランプの各杯に来賓や主催者代表と主要招待者が灯をつけた。(写真下) スリランカでは、イベントへの感謝と成果を祈る神聖な儀式で多くの場所で行われる。私が初めて点灯に参加したのは、2001年国境なき医師団で派遣された病院での5月12日(ナイチンゲールの日)、懐かしい記憶がよみがえった。



10:00 開会挨拶—ディマンチ・ディシルバ実行委員長: 知的な美しさが印象的な彼女が、このイベントの目的を紹介した後、BPW スリランカ創設者であるジャナキ・グンワルデナ会長への感謝のセレモニー、感謝状や花束贈呈、彼女を支えた夫の紹介などが長々と続いた。とはいえ、本人や副会長たちの涙から、彼女たちのこれまでの苦労と今回のイベントが開催できる喜び・感動が伝わってきた。

10:30 フリーダ・ミクリス BPW 国際会長挨拶: BPW 以外の参加者に対して、BPW の活動の歴史を紹介し、現在は UN との協働で国際的な女性団体として世界中の女性の能力を活かすために動いていることを強調した。



[写真左]:フリーダから BPW スリランカ会長へ表彰状
[写真右]スーザン・ジョーンズ AP-RC から感謝の花

11:00 “Change”事業紹介—ジャナキ・グンワルデナ BPW スリランカ会長

“Change”アンバサダー指名—BPW スリランカ会長、国際会長、来賓のスリランカ閣僚

今回の参加申込書には、最初に「I wish to be appointed as an “Ambassador of Change”」にチェックを入れるようになっていたが、これは「To Bring about Change for A Peaceful World」(平和な世界をめざして変化をもたらすこと)を意図した事業を展開する事を誓うという意味であった。(この会場で初めてその事が理解できたのは、私だけではなかったと思う。) BPW スリランカ会長が“Change”事業の内容を紹介したが、これに関するパンフレットには、ラジャパクサ大統領の挨拶に始まり、「近代化の陰になりやすい貧困層、特に子どもたちへの十分な食糧供給と教育の提供を通して、BPW スリランカは次世代を支援することをめざす事業」とある。

この事業への寄付を募るページには、学童一人に対して、文房具や通学カバン、靴1足、通学服や毎日一杯の牛乳を与えるためには、年間約12,000Rp (9000円/2013年8月為替レート) ≙ 毎月1,000Rp (750円)が必要と具体的に記載され、最後の寄附申込書には、「〇人の子どもを〇年間支援するために、寄付をする」と書くようになっていた。そして、アンバサダーとは BPW 内外から公式の申込書を出してここに参加した者であり、今回の登録料の内からこの事業に寄付をしたことになり、名前を呼ばれた者がそのたびに壇上にあがって証書をうけて、重要人物からバッジをつけてもらったうえ、数名ごとに写真撮影をするというのであるから、いかに時間がかかったか、ご想像いただきたい。(写真下)



[下:授与された証書]



11:30 閣僚スピーチ

ーサラシュ・アムナガマ議員・財政大臣代理
ーラクシュマン・ヤパ・アベイワルデナ投資促進大臣

来賓の国会議員や閣僚らしき男性が数名いたが、当初渡されていたプログラムと当日の進行は全く違っており、この時間の前に会場を出ていく人もいたりして、実際には、どなたがスピーカーだったのかは、司会者に確認をしないといけない事態となった。いずれも、1983年以来の内戦の終結から4年近くが経過し、国の今後の繁栄のためにいかに力を入れているかを強調していた。スリランカの特徴は、内戦が続いている時代から教育や医療はすべて無料であった。が、さらなる人材育成のためには小中学校から、さらに高等教育を受ける人を増やす事が重要で、特に女性たちはより躍進することが期待されていた。その背景には、スリランカはアジア初の女性首相を輩出した国であり、その後も優秀な女性が国内の重要ポストや国連などでも活躍してきたことがある。また、内戦終結からより安定した情勢になることによって、観光産業に頼るだけでなく、現在、コロンボに南アジア最大の港湾建設（2014年完成予定）をしており、東アジアやオセアニアから中東・アフリカへの海上運輸の中継地点として活性化することが期待されている。



[来賓らと、BPWI 役員・BPW スリランカ役員]

12:00 挨拶ースーザン・ジョーンズ BPWI-APRC

BPW の地域コーディネーターとして、この地域にどのような連合会やクラブが存在しているかを紹介するとともに、世界の中でのアジア太平洋地域の役割について言及した。



[セレモニーで歌を披露する少女たち]

12:15-13:30 昼食

昼食会場は10階。ホテルで味わうスリランカ料理（ビュッフェスタイル）を楽しむとともに、同じテーブルになったスリランカや台湾・シンガポールのメンバーと話がはずんだ。午後の部の始まる前に、会場入り口前に並んだスリランカ民芸品や宝石販売のブースで、お土産選びも兼ねていろいろ物色した。平松さんはビール（？）ジョッキ、私はサファイアのピアス（値切って…）などを買った。



13:30-14:30 産業界からの発表

- 1) ラクシュマン・ジャヤウィラ博士（投資会議）
- 2) 輸出開発会議メンバー
- 3) ヴィプラ・ワニガセカラ/ロバソソソ事務局長

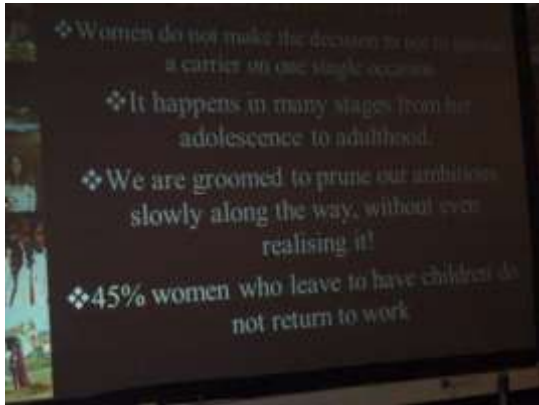
午前中の閣僚たちの発言を踏まえたような、いずれも、より具体的な国内の取り組みを紹介する内容であった。BPW の活動とはほとんど関係がないと思って、全くメモもせず聞き流したので、詳細を報告できないことをお許しいただきたい。各業界の冊子などが、後に配布されたバッグの中に入っていた。最初は、エコ・ツーリズムをテーマの話。続く発言から、豊かな自然が残る島国スリランカとその自然と共生して続いている紅茶産業に代表されるアグリ・ビジネス、それを活かした観光などによって、平和になったスリランカが発展することへの期待が伝わってきた。その地理的メリットに加え、スリランカの高識字率による優秀で国際感覚ある国民の存在や貴重な歴史的・宗教的遺産のすばらしさを強調した点は、何度も滞在経験のある私も大いに納得できた。

14:10 講演「The Strength of A Women(女性たちよ、強くあれ)」 スリランカのビジネス界で活躍している女性の一人ジャナキ・クルップさん(写真下)

は、スリランカ茶会議の会長という仕事以外に、大統領府の仕事や“Mother Sri Lanka Trust(スリランカ母親団体)”会長などを務めている。自身のキャリアパスを紹介するだけでなく、BPW という女性団体の集まりであることに配慮



されて、今後、女性が活躍するために何が求められるかと訴えていた。「かつては、女性には美しいこと、控えめなことなどが求められ、美と知性をともに備える事は不可能と言われていたが、これからはそうではない…」と、女性のエンパワーメントの重要性をアピールした。



15:00 トウニング・セレモニー BPW スリランカとBPW 台湾のトウニングのための書類への署名や記念品交換・写真撮影などが続いた後に、今回のイベントに関する海外との連絡を担当したイランティ・アベイスリヤ BPW スリランカ事務局長の謝辞で、やっと1日目の公式日程が終了した。この終了間際に、日本から持参していた壁掛けをクラブ代表に手渡して、何とか日本からの謝意を示すことができたことを付け加えておく。

[トウニング書類へサインする両会長]



[日本からは
掛け軸を]



19:00 ガラディナー 夜の懇親会は、ホテルのプールサイドでのBBQ。ちょっとうす暗く、日本人メンバーが座ったテーブルの脇には大きい石が飛び出した砂地でのパーティー。道路をはさんですぐはインド洋で、大きい波が打ち寄せる中、潮風を感じながらの食事。現地のバンドはマリアッチ

のような衣装でカンツォーネやスキヤキソングなどいろんな国の歌を歌っていたのが、ちょっと異様でもあった。多くのBPW 台湾会員は、大阪大会に参加された思い出や、京都・大阪とトウニングしたこともあって、とても日本からの参加者に好意的に話しかけてきて、前夜の睡眠不足も忘れて楽しい夜を過ごした。

大会 2 日目

事前に送られた案内から、2日目は、BPW スリランカが行っている子どもの教育支援事業の見学がメインだと思っていたら、プログラムを大きく変更されていた。7:00 にホテル出発というのを、交渉して遅らせてもらったが、集合時間通り集まった海外組に対し、ホスト側が自家用車をどうするかとか、直前に衣装替えをするなどで、1時間遅れての出発となった。そして、訪問したのは、BPW スリランカ会長の婚家の領地見学をした。(BPW としては、「婚家(嫁ぎ先)」という表現に抵抗があるが…) 彼女の場合は、まさにその夫の父親の実績・名声を活かして、その領地で慈善事業を展開しているというにふさわしかった。

9:00 BPW 台湾が彼女たちの市内観光および移動のためにチャーターしていた大型バスを利用させてもらって、車に揺られて1時間余り。訪れた先は、イギリスからの独立運動指導を指導したことで罪を問われて亡くなったBPW スリランカ会長の夫の父親のための私的な寺院とそのお墓、その義父が設立したいくつかの学校を見てまわった。寺院の中には、義父の生涯を語るシーンが壁や人形で現わされ、仏教的でありながらカラフルさに圧倒された。



[写真上・左：独立の闘士であった会長の義父の人形、右上：彼らを守る仏
右下：この寺院一帯を管理している敷地内の寺の僧侶]



その後、彼女の私邸に案内されて、飾られている絵・写真や調度品の説明を聞いたり、庭で記念写真をとったりしてココナツジュースを飲んだだけの1時間、個人的にはいったい何だったのかなあ？と思ったのは正直なところである。



有力者・権力者が、その領地の住民や子どもたちのために、まず教育の場を提供したことは印象的であった。この地域（Borulugoda）は、農業・漁業で日々を暮らしている一帯である。



11:00 支援する村の見学 豪華な私邸で一服の後、さらに1時間近く走って、BPW スリランカ会長が支援している村があり、まず人並みの家に住んで暮らせる場所を提供することから始めている住宅地を見学した。ほんの十数軒だけの一帯で、BPW スリランカも支援をしているからか、気さくに家の中を見せてくれて、海外からの訪問者は彼らの実際の暮らしぶりを写真におさめた。



[写真：支援する村や地域の人たち]

日本でも似たような風景…、50年余り前、私の生まれ

た長崎の田舎町には裸足で遊んでまわる子どもたちがいたし、よくて草履。釣れたばかりの魚をかごに入れて売りに来るおじいさんが来るのを楽しみにしていた時代があったことなどを思い出しながら、ここを見学した。

その後、さらに山奥にむかって“アドベンチャー・パーク”という場所で、典型的なスリランカ料理をランチとして頂いた。平松さんのような純粋な日本人にはちょっと辛すぎる味だったようだが、私には懐かしく、とても美味しかった。満腹になったあと、いったんホテルへ戻った。必要な人は衣装替えをして、大統領官邸での子どもたちへの靴と本の贈呈式に臨んだ。

17:00 Change 事業—子どもたちへの贈呈式 厳重なセキュリティチェックを通過し、甘い甘〜いドリンクとスナックを食べながら、全員が揃うのを待って会場に入った。すでに100名以上の年齢もさまざまな子どもたちが中で座って待っていたことを知って驚いた。贈呈式のほとんどは現地のことばで、内容はわからなかったが、ジャナキ会長の挨拶の途中、子どもたちに付き添って同席していた大人数が急に立ち上がり抗議の声をあげたのには海外からの参加者は驚いて顔を見合わせた。どうも、民族文化的に非常に敏感な問題に触れたことが原因のようだったが、本人から何の説明もなく、とても残念であった。そして、20年余りの紛争から、一見平和が戻ったように見えても、まだまだ微妙な状況の一環をみた瞬間であった。さらに、100人以上の子どもたち一人一人に本やノートが入ったバックパック（袋）を手渡すセレモニーが始まり、こどもたちは渡す人の前にひざまずいて感謝の意を表するというのが続いたが、私にはあまりにも善意の押しつけに見え、居たたまれなかった。ただ、スリランカの人々には昔からの礼儀作法なのかなあ…と思って、その時間を過ごすしかなかった。

というわけで、20年目を迎えたBPW スリランカが、平安の戻った国をさらに発展させるために、子どもたちへの教育や貧困層への自立への支援などをするなかで、スリランカ女性の活躍を推進するという強い意思を感じた2日間であった。また、2日目の夜は、平松さんといっしょにフリーダ国際会長と話をすることもできて、彼女も率直に現状を説明してくれ、しばらく、BPWのメイン活動から離れていた私はこの3、4年の変化を知る貴重な機会となった。そして、韓国・チェジュでのBPW国際コンGRESS（2014年5月23-27日、<http://bpw-international.org/congress2014>）により多くの日本のBPW会員といっしょに参加したいと決意し、夜中2時のフライトでの帰国の途についた。

同行の大先輩、平松さん・花崎さんには、この機を使って謝意を示したい。

大会3日目—南部開発地域の視察

平松 昌子

3日目、午前5時起きで始まったツアーは、高速道路の爆走を体験した。ゴールで高速道路をおりると、緑の田園が消えて、道路も地域も工事中という風景の中に突入した。



南に下る道路の左右に広がる緑の水田



南に下ると次々に道路沿いにリゾートホテルが並ぶ。そのうちのひとつで朝食をとった。(写真上・左右)

立って路傍で待つこと15分、やっと到着した担当者の車に先導されて着いた先は港湾を見渡せる高台だった。ベンドンパタ港。第1次計画を終え、第2次工事中だというが、埠頭には数隻の貨物船が接岸し岸壁には輸出か輸入か乗用車が並んでいた。2040年までに完了予定という。インフラ整備に欠かせない空港については、この近くに第2国際空港として建設され、今年からその運用が始まっているようだ。



最南端の港湾開発(中国との共同開発)について担当者が説明

スリランカの経済開発計画では、お茶とゴムそれに米など植民地時代からの1次資源への生産加工だけではなく、それらも含めた商業取引のハブとして、ITなど技術教育のハブとして、そして何より観光資源の活用を目指して、国を挙げての取り組みを進めることになっているようだ。



【南部開発の至るところに入り込んでいる中国資本】

早朝から深夜のフライト時間に間に合うかを気にする時間までかけた視察ツアーは、この国を挙げての取り組みを理解し、協力を求めるためには必要なものであった。プログラムには、このツアーについて国会議長の後援と書かれていた。

立ち寄ったバントタ省商工会議所では、所長アスマ・タシム氏が南部地域開発計画についてPTを使って手際よく説明してくれた。それらの計画策定には女性が参加しているかという質問には肯定的に答えたが、急速な開発が、土地の高騰その他、生活に歪を生む恐れはないかという質問には明確な回答を避けた。11月にはコロomboで首脳レベルによる「イギリス連邦ビジネスフォーラム」の開催が決まっている。



(写真左) 地域の商工会議所

説明する所長⇒



(写真左) 帰路で… 水牛の群れでバスはのろのろ運転

「初めてのスリランカ」

花崎 正子

(連合会国際委員長／BPW 北九州クラブ)

スリランカ訪問は初めてである。今回の3日間の会議の内容については、すでに平松・黒崎両元会長によって詳しく述べられているので、ここでは私は単なる感想にとどめる。いや、個人的な感想しか述べられないほど、お二人のスリランカへの認識と洞察と、私のそれとに大きなギャップがあると感じたからである。私はこれまで、200人もの学生引率や研究・学会なども含めて何十回となく外国を訪問し、外国への見聞を深めてきたつもりでいたが、今回は何が違う。数年前まで国内紛争に喘ぎ、生きるということに必死に対峙してきた人々の心情に押しつぶされそうになっていたのであろうか。あるいは国際委員長という立場でありながら、スリランカを見る目が定まっていない苛立ちからきていたのであろうか。ともあれ、そのような定まらない感覚の中での3日間であった。

日本から長い飛行の末、深夜近く、やっとコロンボ国際空港に着いた。そこにはかつて出会ったナガさん（彼はインド人だが、現在カナダの大学の名誉教授。一昨年は国立台湾大学に講演に招かれ、昨年は派遣教授として日本の大学でも教鞭をとった米国留学時代の友人の一人である）に似た人々がたくさんいた。端正な顔立ち、控え目で、大きな瞳の奥に優しさを湛え、ほほ笑んでいる人々である。それだけでスリランカに親しみが湧き、私の心は開かれていくようであった。不思議な感覚である。異なった文化を許容し、人と人とが共生する原点がそこにあるように思えた。大国インドのすぐ傍にありながら、かつてはインドからの移民であったという島国の人々は、広いインド洋（写真1）に阻まれ、仏教徒が7割という、インドとはまた異なった独特の文化を培ってきた国である。しかし、人と人とが共生することはそんなに生易しいものではないことはスリランカの歴史が証明している。ではどうすれば人類はともに生きていくことができるのだろうか。

[写真1 ホテルの窓よりインド洋を臨む]



会合の初日に出席者全員に配布された無料の冊子『Dhammapada ダンマパダ』（法句経。原始仏

典の一つで、釈迦の語録の形式を取った仏典であり、語義は「真理の言葉」といった意味であるという。法句経については日本でも多くの本が出版されている）が、国の持続可能性をひとり一人の心の開発によって統治しようと願ってなのだろうか。私は、所属学会で報告された、スリランカが力を注いでいるという南部の経済開発に思いを馳せていた。そして、この『Dhammapada ダンマパダ』冊子の配布は、経済開発と人間開発を国の持続可能な発展の両輪として取り組んでいるということの表明であったのだろうか。このことにBPW スリランカはどうかかわっているのだろうか、あるいはかかわろうとしているのだろうか。

そこまで考えたとき、日本ではよくわからなかった本会案内リーフレットに書かれていたテーマが頭をよぎった。それには、BPW スリランカ設立20周年記念のこの国際会議は、経済開発、共同起業、エコツーリズムを促進するためのものであり（The International Conference to Promote Economic Development, Joint Venture Partnerships & Eco Tourism）、平和な世界を実現するための“変化”（To Bring about Change for A Peaceful World）をもたらすことであるということが書かれていた。そして、その経済開発は、平松元会長が報告されているように、共同起業・エコツーリズムによるものと解釈できよう。あるいは、そのような視点をもつものとも言うことができよう。そうだとすれば、ここでの経済開発は、いわゆる先進国が辿った近代化の方法や経路とはやや異なっているということであろうか、あるいは先進国の経済開発のあり方の反省の上に立った開発と言えるひいき目すぎるだろうか。このことについては、私のスリランカに対する浅い知識では安易に結論づけられないので、今後の学びにより解釈を正していく必要がある。ただ、BPW スリランカが、黒崎元会長が報告されているように、平和な世界を確立するためのChangeが、次世代を担う子供たち、特に開発の恩恵を受けることからこぼれた子どもたちの心身の育成への支援に関わっているということは、BPWのミッションの具体的取り組みとして、私には新鮮であった。ともあれ、経済発展を悲願としながらも、それに伴って発生する生活面における負の部分にBPW スリランカの活動により補い・解決しようとする意気込みが伝わってくるようであり、スリランカの経済発展に対するBPW スリランカの立ち位置が示されているようでもあり、勇気づけられるような思いがした。そして、2日目のフィールド・トリップは、そのことを具体的に明らかにしてくれたように思う。

私が、なぜBPWのミッションに拘るのか、その理由をここで述べる必要がある。日本人の生活意識で「心の豊かさ」追求が「物の豊かさ」追求をこえたのが、高度経済成長期が終わり安定成長期に移行する70年代の終わりであり、現在日本人の6割以上が「心の豊かさ」を求めている。しかしながら、どれだけ日本女性が社会変革に対してそのような人間の心の問題まで切り込む確たる視角を持ち得ているだろうかと考えてきたからである。我が国では、男女共同参画基本法が制定されて以来、国を挙げて男女共同参画実現へ取り組んできたが、何故、女性の社会進出は進まないのか、それは、単なるジェンダーの視点の導入だけでは十分ではなく、人間の生き方意識・働き方価値を根底から問い直し、持続可能な社会を実現するための人類共存・共生のキーワードを見出し、それらによる社会変革の具体的活動としての社会進出が必要ではないかと考えてきたからである。すなわち、女性の社会（とくに経済界）への進出を、人間の心の問題を意識化し、取り込んだ新たな生き方価値を創造し、具体化することと捉えるということである。

2日目のフィールド・トリップは、また、それらを実証するかのような活動事例の紹介であると受け止められた。スリランカ会長が支援しているというコロombo東方の農村地域を訪れた。そこは、スリランカ会長の広大な領地であるという。地図上でその場所を確認したいと思い、スリランカの案内の方に尋ねたが、多分この辺りとアバウトな答えしか返ってこなかった。

バスで約2時間。コロombo市街を離れると、車道の両側は、モダンな高層ビルから平屋あるいは2階、せいぜい3階建の個人経営と見えるショップや住宅に変わる。他のアジア地域でよく見かけられた大都会への入り口に農村から職を求めて集まった人々や、都市の再開発のために移住した人々の居住地帯とは様相を異にしていた。人口密度が低いからか、自然の豊かさがなせる業か、敷地と家は広くゆとりを感じる。庭先や玄関などを掃除している姿もときどき見られた。人々の歩みもゆったりとしてみえる。1時間以上走ったところで都会の喧騒を離れ、道の両側にはココナツ林や名も知らない熱帯の木々が生い茂る森が広がる。この辺りは湿地ゾーンで、ところどころに沼のような湿地が点在する。大トカゲや蛇が、道路を横切ることもあるので気をつけるようにとの事前情報も役に立たず、残念ながらおめにかかることはできなかった。スリランカの主要輸出品目は、近年は工業製品、特にテキスタイル製品へ移

ってきているということであったが、伝統的3大農産物のうち、ゴム、ココナツの木々がすぐそこに見えた。自然の豊かさがそこにあった。

バスを降り、トゥクトゥク（自動三輪車、無理に乗れば後に3人、運転席の横に1人の3～4人乗り）に乗り、会長が住宅支援してつくったという集落を見学。大きな家ではないが、いずれの住宅の中も整頓され、テレビが置かれていた。ここでも、そこに住んでいる人たちの控え目の大きな瞳が印象的だった。子どもたちは、思い思いのカラフルな服装で、明るく屈託のない笑顔を見せてくれたが、カメラを向けるとやや緊張してみえた（写真2）。一軒の家の主と思われる男性は、上着は着用していなかったが、下着（アウトター）はいわゆる伝統的円筒状のサロン（スリランカ語はわからないが）で、深紅の細かな格子模様がまわりの緑によく映えておしゃれであった（写真3）。そのサロンは胸元の近くまで高く引き上げられ、腰ひもには、余った布を無造作にタックインしてあり、涼しげであった。



[写真2：上左：やや緊張気味の子どもたち]

[写真3：上右：成人男性のサロンと子どもたち]

この伝統的な服装は、後で述べる大統領官邸での文具や本などの贈呈式に参加した11歳の少年にもみられた。真っ白な木綿のサロンを、腰ひもで長さや幅を調節し、白いスタンドカラーのシャツと組み合わせて着用していた。この服装は1日目のカンファレンスに参加された政府の高官とみられる男性たちにも着用されていた。色と生地が正装にもなるということがわかる。

[写真下：成人男性の正装]



ついでに BPW の活動とは直接的には関係ないが、スリランカの生活文化理解のための一端として女性と子どもの盛装にふれると、宿泊ホテルのホールでたまたまみかけた結婚式後の花嫁の友達や家族の衣装は華やかなサリーで、子どもたちは洋装であった。産業の発展を支えているテキスタイルの製造技術がさらに高度に発達してきたということの証でもあろうか。



[写真右上：成人女性と子どもたちの盛装]

午後は、大統領官邸での子供たちへの文具や本・靴などの贈呈式があった。BPW 会長の子供たちへの力強いメッセージがあり、次代にかける熱意がみなぎっていた。子どもたちは民族衣装の正装や立派な制服を纏っていた。午前中、農村地域で見たあの子供たちには、このようなハレの舞台へ登場するチャンスは与えられているのだろうか。

の思いがふっと頭をよぎった。贈呈品が入ったナップバックは、子どもたちひとり一人に手渡された。こどもたちは前に出て、それを手渡す人の足元に跪き、頭を下げ、お礼の意をあらわしていた。私たち座式であるいは立式で、同じ高さの目線で挨拶を交わす習慣を持つ日本人には、違和感があったが、これが文化の相違というものなのだろうか。あるいは、座式と立式が交差する文化の象徴か。ただ、ひとり一人に手渡す方式は、ひとり一人を大切にしているということの表現でもあったのだろうか。1日目にも20名位の小学生がカンファランス会場のステージで合唱してくれた後、会場を去るときに手渡されたノート（はっきり確認はできなかったが）も、ここでは立ったままであったがひとり一人に手渡された。

たった3日間のスリランカ訪問ではあったが、実りの多い3日間でもあった。BPW スリランカの方々、わたくしどもに快く接して下さった方々、そして、スリランカのみなさまのホスピタリティに心より感謝する。また、平松・黒崎両元会長には個人的なことで大変お世話になった。この場をお借りし、お礼を申しあげる。